

フズリナ化石に惹きつけられ石灰岩薄片作成 45 年

小林文夫(自然・環境評価研究部)

フズリナは古生代後期の石炭紀からペルム紀(3.3億年から2.5億年前)の熱帯～亜熱帯域の浅海にすんでいた、石灰質の殻をもった原生生物界根足虫門有孔虫綱に属する原始的な生きもので、殻の大きさ・形・内部構造が時代とともに変わっていきます。進化速度が速く、地層の年代決定に有効で、各地で多産することから、一時期、中学校や高校の教科書にも取り上げられたことのある、古生代後期の代表的な示準化石です。

1950年代から1960年代には、日本でも大学などの研究機関に多くのフズリナ研究者がいました。1970年代になると急速に減り始め、今では数えるくらいになりました。日本のフズリナ石灰岩の年代分布の全貌がほぼ明らかになったこと、フズリナ化石による日本の“古生層”の年代決定が疑問視されるようになり始めたためと考えられます。

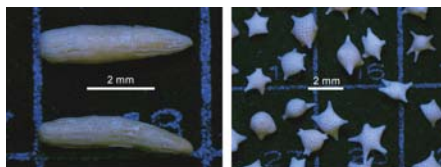
私のフズリナ化石研究は、人と自然の博物館に登録・保管されている「小林文夫コレクション」を土台にしています。同コレクションには、いつ・どこで・どんな研究をし、論文文化されたかという私の40年以上の研究歴が潜んでいます。その気になれば止められないという私の性分もあって、根気よく世界各地の石灰岩の薄片作成を続けてきました。薄片総数は4万枚を超えました。これからも増えていきます。博物館での定例記者発表はおろか、学会で口頭発表もしたことはありませんが、私が提唱したフズリナ類の1新亜科(*Gifuellinae* Kobayashi, Ross, and Ross, 2010)と2新属(*Gifuelloides* Kobayashi, Ross, and Ross, 2010 と *Tsukumiella* Kobayashi, 2013)も「小林文夫コレクション」に基づいていることをこの際に、読者の皆様方にお知らせしておきます。



福岡県大垣市赤坂の赤坂石灰岩。フズリナ化石産地として世界的に有名。



奄美大島北部のサンゴ礁に面した砂浜。サンゴ礁の一部が波で浸食され、海岸に打ち上げられたもので、有孔虫や造礁性生物の遺骸が多く含まれる。将来、石灰岩となる。



奄美大島北部の海浜堆積物中の有孔虫。a: alveolinids (アルベオリナの仲間、現世有孔虫では最もフズリナに近縁)、b: *Baculogypsina sphaerulata* (Parker and Jones) (俗に星砂と呼ばれる)。

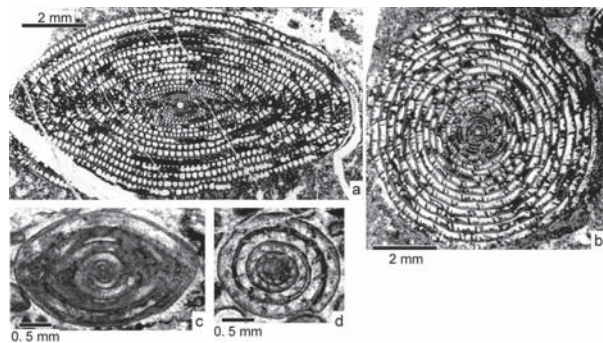


図. a, b: *Gifuellinae* *largae* (Morikawa and Suzuki)、福岡県大垣市赤坂石灰岩、ペルム紀中期後葉、

a: 正縦断面; b: 正横断面; c, d: *Tsukumiella* *tsukumiensis* Kobayashi, 大分県津久見市津久見石灰岩、ペルム紀後期; c: 正縦断面; d: 正横断面

【参考文献】

Kobayashi, F., Ross, C. A., and Ross, J. R. P. (2010) Classification, phylogeny, and paleobiogeography of the new Subfamily Gifuellinae and a revision of the Family Neoschwagerinidae (Superorder Fusulinoida); Guadalupian (Middle Permian). *Journal of Foraminiferal Research*, vol. 40, no. 3, p. 283-300.

Kobayashi, F. (2013) Late Permian (Lopingian) foraminifers from the Tsukumi Limestone, Southern Chichibu Terrane of eastern Kyushu, Japan. *Journal of Foraminiferal Research*, vol. 43, no. 2, p. 154-169.

エドヒガン満開「ふるりの森」づくり

西澤孟治(溪のサクラを守る会代表)

川西市水明台のエドヒガン群落は兵庫県版レッドデータブックのBランクおよび川西市の天然記念物に指定されています。今回の記事は、「平成25年度ひょうご森づくり活動賞」の受賞団体で、この群落の保護に精力的に取り組まれている「溪のサクラを守る会」の活動をご紹介します。



活動地のエドヒガン群落



溪の桜守 黙々と活動中



開明小学校3年生 環境体験学習

環境体験学習 植樹



桜台小学校3年生がつくった「みどりっこみち」

環境体験学習 毎木調査

「ひょうご森づくり活動賞」受賞を聞いて、5年・10年後に水明台エドヒガンの森はどうなっているだろうかと想像をめぐらせました。「未永く命のパトンを繋ぎなければ…」の思いとともに活動の一端を紹介いたします。

エドヒガン群落の保護を始めて6年目、80本を超える高木の根元に光を届けることができ、木々は枝葉や花を増して元気を回復しました。植樹や自生の子供を合わせると200本を超える群生になり将来が大いに楽しみです。隣接する溪にはさらに数十本のエドヒガンがありその命を救うために保護域を拡大中です。一方で密生しすぎているエドヒガン間伐の是非や方法、幼木の生育管理など新たな課題に直面し頭を悩ませています。

生物多様性も劇的に進みました。5年間掘りためたこのほど刊行した写真集「溪の四季に咲く花」によって成果の一端を示すことができ、真っ暗な森を拓くと多くの樹木や山野草が蘇ることも学びました。リンドウ・カワラナデシコなど地域の希少種や、開発によって根絶やしになるイチリンソウ・ユキワリイチゲを溪に移植して、根付きと開花を確認しました。今後は貴重な植生の適切な管理、外来種管理などをいかに進めるかが大切になってきます。

地元小学生の環境体験学習は5年目を迎えてすっかり軌道に乗りました。プログラムも15種類を超えて多彩になり、年中子どもたちの歓声が溪にこだましています。中学生の「トライやる・ウィーク」の支援も始めました。子どもたちと保護者がともに体験する環境学習、中学校に上がっても再び溪で活動して「ふるさとの森」へ思いを新たにする学習を目指して、一層充実させていきたいと思っています。

私たちは毎週木曜日、ほとんど年中活動しています。溪では9:00～12:00まで3時間を過ごしますが、仕事だけでなくストレッチ体操やコーヒープレイクのよもやま話にも、たっぷり時間を割いています。お互いによく話をよく聞き、笑顔いっぱいの活動を進めて達成感という果実を共有し続けたいと願っています。(お問い合わせ:072-792-8861)



緑陰のほっと一息